六月のある一日、海辺の生物の専門家である酒井恒先生に案内していただいた、三浦半島の海岸で半日を過ごしました。いまだ、気がつかないで、足の下にたくさんの生物の生活があらわれ、はげしい感衝撃を与えました。陸と海との中間に、ひしめいていたな気がしました。子どもたちも、こういったところに連れて来たいし、幼稚園の先生たちにも知ってもらいたいと思って、そのときの模様を記することにしました。

（参加者：小学生、中学生、大学生、大学生院生など多数）

海岸に通する路たびに黄色い蝶形の花が一面に咲いています。これはみやこ、どこです。いまさかかりをすすぎているけど、これが全部咲くと、とてもきれいです。

先生がタンポポの茎をとって笛をつくってならしました。「笛って、どうやってつくるの？」

子どもたちは気をつぶして、「アイヤー、あらほんとだ、おもしろいみんなで
 nostalgische Erinnerungen

** enthält Begriffe wie**

- 海岸の礫を片付け
- 八丈の子
- 大きな一枚一枚の岩
- 潮間帯は
- 鮫がいたところ
- 潮間帯
- の住人たち

**Zeitpunkt der Entstehung:**

- 1940er Jahre

**Hauptthema:**

- 海岸の礫を片付け
- 八丈の子
- 大きな一枚一枚の岩
- 潮間帯は
- 鮫がいたところ
- 潮間帯
- の住人たち

**Sprechakt:**

- 海岸の礫を片付け
- 八丈の子
- 大きな一枚一枚の岩
- 潮間帯は
- 鮫がいたところ
- 潮間帯
- の住人たち

**Sprachstil:**

- 1940er Jahre

**Kulturelle Ausrichtung:**

- 海岸の礫を片付け
- 八丈の子
- 大きな一枚一枚の岩
- 潮間帯は
- 鮫がいたところ
- 潮間帯
- の住人たち

**Graphische Darstellung:**

- 海岸の礫を片付け
- 八丈の子
- 大きな一枚一枚の岩
- 潮間帯は
- 鮫がいたところ
- 潮間帯
- の住人たち

---

**34**
 tahun

ちいになっているでしょう、ルーメン出した、どんな形してますか。
うずまきになってるでしょう、これ、みんな動物ですよ、
よく見てとうずまきになっているから、うずまきこかいという名前ついてる。
中を見ると、うずまきそのものが入ってます。
このひとつひとつの中にですか。
どれ、見ましょう。

ところにくると、巻貝がいっぱいいます。
これはうみに
な、むしをなしています。

ここに
「なら、なに、これが」
「それは、あめふるし」
「きもちわるい」

これはなんだだろう。よく見ると、いそぎんちやくです。
これはうみに
「なら、なに、これが」

ルーメンで見てもברהシなんて。
あ、つぶつぶがある。
「うみそうめんといいます」

これは、大分発育してて、もう少しでかえります。
もっとも、こっちにもある、みんな合わせたら何億個にもなるでしょう。

これなんの形してるかしら。水とりの足のようなでしょうか。
「らしいの先でこけると内側にきれいな貝

肉がみえる。
これらは似てるけどちがう。これほしさらって。

マ。
この卵のたまりにあたる卵殻の数は、二万個以上あります。ひとつの卵が、何万個、十何万個とたくさんの卵を生むんです。まるで、本当にそこに寒天の卵をかぞえると、これだけ何百万個、何百万個であるでしょう。ゴマ類の卵のかたまりは、初夏のころには、いろんな動物が、さかんに卵を生みます。生まれた卵は、百個、千個、万個と、たくさんあります。卵のたまりには、冬がきたときには、自分の力で冬を越せるように、育てた卵をかぞえると、自分の力で冬を越せるように、生み出す。それだけ合わせるように生み出します。十月の終わりに、冬がきたときには、自分たちの冬を越せるように、生まれた卵をかぞえると、自分の力で冬を越せるように、生み出す。卵のたまりには、冬がきたときには、自分たちの冬を越せるように、生まれた卵をかぞえると、自分の力で冬を越せるように、生み出す。卵のたまりには、冬がきたときには、自分たちの冬を越せるように、生まれた卵をかぞえると、自分の力で冬を越せるように、生み出す。卵のたまりには、冬がきたときには、自分たちの冬を越せるように、生まれた卵をかぞえると、自分の力で冬を越せるように、生み出す。
い。
「これはなんですか。」
「これは赤だけ、それは陸のものです。ここは、陸と海と

の境です。陸のものが海に下りてくることもあります。海

のものが陸に向かって来るのは多いです。

こういったこの海岸の長さは、地形で見たから○キロでは

なく、三倍にも五倍にもなる。三浦半島では○キロが、

三キロにも五キロにもなるんです。だから、海岸線を埋め立

て、こうやって道路を作ったりするのは大損害なんだ。

ここを海生物たちはみんな卵を生む。毎日、毎日生産数は、

天文学の数字になる。これが動物性プランクトンです。植物

性プランクトンの中にあればならいないものも多い。いっぱい

食べてもどうかかも知れぬ、みんな。

海岸線をこんなはあに岸壁にしたりしない。
こうしてかかった卵は、沖の方にいて食べられるのが大
部分でしょう。あるものは、再び礁にもどってくる。もどっ
てくる力は何によるか、いったん、観察したかったけど、見え
ないから、どこに岩礁があるかなどわからないようだ。しか
し小さいから、潮の流れに逆らうわけにはいかない場合も多
い。そうやって流されたのは、もうぎってかいに助からない。

これが、ふうふうのあの、いまのような動物がだんだん育っ
てくると、ここが元々きて育つんです。

それは安全だからです。

うるうの子どもたち、ひとつの子どもたちみんなここ
いうところで育つんです。ほら、これは、やらしい、こ
れはうふうも。いそゆめそうともいう。ここいうところにみ
んなひそんでいる。これはぶどうかいの子どもです。

すい分、名前があるのね。

そう、みんな名前がある。だんだけね、全部おぼえて

てよい。これは何の仲間というか、もしかも、これに

「それはね、くらいそうかい、あん。それは、かごのなり、あ

そこににあるのは、ふくらの、そこににあるだいだい色のが、
だいただいそうかいあん、かいあんも立派な動物なんですよ。

これがハイドロゾアといって、天皇陛下の研究していらっしゃるものを仲間です。
それから、つどいに、いろいろの動物がいました。亜ケ、
のなかまではひふ、ようくかい、いぼし、おおへびか、
二枚貝ではり、があ、つが、い
からやつでひとでなど、実物がないとわかりにくいから、簡
単にししてますから。

これは、ふじのぼ。ふじのぼのひとつの特長は、一
度くつったら、生涯これでおしまいということです。いわ
うとんと歩いてないね。それで十分です。腰をおろしてじっと
見ていると、たくさんいるでしょう、みんな生きているんす
よ。そして潮がみてくると、手を出して、生態活動も始ま
ります。

これはほや、群れはやといいます。何匹かで共同の排

ここで面白い動物がいるよ。気持ちがわかるかもしれない
が、かつつきものんにもしないから、とってもちょっと

にぎれた一件、おがいだほ、かびしけっついてるでし

よう。もとのようにしておいてやらないと、みんな死んじゃ

にぎれ、ひっくりかえしてやってどうだ。

ほら、岩の上で、こうして耐え忍んでいいるんです。耐

え忍んでいるっていうことが、だんだんと陸の動物ができ

て、自然になりにいくんです。よく自然に考えて、いけないんです。
「どうしてかね。そう。まわりながらうむんでしよう。
あめふるしの卵は。一本のひもが形のゼリーをからげてい
生むところを見ると。かいこがまゆつくときのもよう
に。からげていく。とげ流れてはしょうがないということを知
っているか如くね。動物っていうのは。小さいも生活の
知恵がある。そうでないと人類が繁殖しない。人間だけじゃ
ないで。みんな個々の繁殖。孫の繁殖の願いがある
んです。
それでいながら。共同生活してる。ここだって。ひとの
動物だけではないでしょ。かならず群をなしている。助け合
いうのがある。中には。つかまえては食べてしまうけど。よ
ないギャグもあるけど。お互いに毛もたれた生活してい
いるということ。人間や陸上の動物より。はるかにすぐれてい
る。かんざしひかいないんで。一匹が何方数の子どもを生んで
もし。この海岸だけで何月も卵を生むでしょ。どうか親同
じくらいの数だけしか生き残らね。あとは他の動物をさ
ってきてしまう。ちょうど。牛がミルクを出して。子牛が
になったでしょう。もう伸びたな。体の弱いものや freda いっ
ていうように。何匹という卵をうんで。ブランクトンになる
ても。親になるわずかの他は。奉仕してるとててててて。

人間が健康を保てないから。人間のために自然を保護する
自然保護なんて。人間さお。ほしかったろうね。こうして。お互いに
かもとたれつしてるのが。自然の世でしょ。人間はあんま
開眼しごたりして。いまあててて。そんな自然保護が重要なん
り自分勝手に考えすぎたね。殺しごたり。切りすぎた。人
間のためのものです。自然のための自然保護が必要なん
ない。法律的。思想的な自然保護じゃない。おはなしにならない。
生物はすべて。人間と同じ生きる権利を持っているのね。人
間と自然は一緒に生きるのもとの姿でしょう。一本の
いちの木が。たくさん実をならせて。世の中を全部い
「初めに、本当の海へいった話ですね。悲しくて、帰ってきた。びっくりしたように教えたくて、海の水をのんじゃったんですよ。」

先生は、幼い頃から生物がお好きだったのですか。

「私の小さなころは、おうちなんても、何もなかったですか。」

自分たちで何を工夫して、日が長くなるまで、遊びましたよ。

先生は、カニの、何にひかれて、カニを専門になさったのですか。

「ウーン、カニはね、人間にとって似ているんですが。カニのときはね、人間の手と同じで、ものをつかんだり、カニはいろんなものを持っていき、穴をほったりさまざまなことがでるんですね。そして、知って、知っている、体を支えている、高度な動物ですが。小さいカニ、大きなカニ、かたいカニ、といわれるカニ、いろんなカニですね。」
「今日はみつけた、アオウミウシの美しいは、びっくりし
ました。」「きれいですね、極彩色ですね。人間は勝手に、動物の世
界には“保護色”があるなんて思っているけど、いろいろで
てね。かえって、色を目立たせ、相手をびっくりさせたり
してね。海の世界はきれいですよ。赤や青、黄色や……」

室の大きい水槽をさして、あの魚も、白い地に黒と黒の太い
線、きれいですね。生物の研究者には女性が多いですよ。カニの専門家も、各
国で女性研究者が活躍しています。細やかな研究をして、
国を教えて外国へいくと、私なんでも非常に歓迎し
ていくべき遠い思いをしていますよ……ハハハハハ……。日本の女
性もどんなにいいですか。頭張ってほしいですよ。

「あのう、陛下は、どんな方ですか。」

「イノシシなさって……。あの年で、いつもお世話をして
らっしゃいます。観察に船で出る時も、潮のかぶらの所で、
正座していらっしゃる。そして、人に裏表があるなんて、思っ
てもいらっしゃらない方ですよ。いろんな所へいって、私
へのおめでとう、そこでとれたカニをくださいません。人に気
を使わ、いい方ですよ。あのあたりの海にいっしょ。

「いいえ」

あの長者か崎の先は、無精地帯で、松葉菊が、塩根こしに
たりはいいですよ。

近ちちの葉山の漁師さん、自分で魚をとるより、お客
さんをつく方よりもかうようになっている。

帰り道、つり船が帰ってきた港を見て、ボッリとおっしゃ
いいました。「まだまだ遊ぶ足りない気持ちを残しながら、すばらしい世
界を展開して私たちに見せてくださった、やさしい目の先
生」と、お別れしました。

いつもでも、いつもでも、手をふって、バスにのっていか
れました。

（前田路）